

20章～22章

テーマ:王国内での反乱、復讐、そして飢饉。王国の外でのペリシテ人との戦い。

20章は、ダビデに反抗して起こった、もうひとつの反乱の記録です。あの全部のトラブルがダビデに起こったあとでは、主は彼を大目に見てくださると思いますよね。でも、主が約束されたとおり、剣はダビデの家を離れることはありません。このすべてのことが起こっても、ダビデから泣き言は出てきません。彼はこれをただ、自分の罪のための罰と認識しています。

見たところ、イスラエルの人々のつまらない嫉妬の結果、ベニヤミン部族のシェバに率いられたもうひとつの反乱が起こります。なぜなら、ダビデを王座に戻すことについて彼らは相談を受けなかったからです。

シェバの反乱

(II サムエル記20:1)「たまたまそこに、よこしまな者で、名をシェバという者がいた。彼はベニヤミン人ピクリの子であった。彼は角笛を吹き鳴らして言った。『ダビデには、われわれのための割り当て地がない。エッサイの子には、われわれのためのゆずりの地がない。イスラエルよ。おのおの自分の天幕に帰れ。』」

シェバは「よこしまな者(訳注:原文は a man of Belial: ベリヤルの人、すなわち悪魔の人)」と呼ばれています。つまり、彼は民衆の扇動家であったことを意味します。

(II サムエル記20:2)「そのため、すべてのイスラエル人は、ダビデから離れて、ピクリの子シェバに従って行った。しかし、ユダの人々はヨルダン川からエルサレムまで、自分たちの王につき従って行った。」

イスラエルの子らがどれほど信義のない、信頼できない者たちであったかは驚くばかりです。

「いやあ、これは人間が発達して文明的になる前の粗野な時代のことだから」

という人もいるかも知れませんが、そう言う人々には、私は質問したいのです。今日、事態は良くなっていると思いますか？

興味深いのは、この国の大統領や、そのほかの公的な役人が何か言うべきでないことをひとこと言っただけです。そのあと世論調査をしてみると、その人の人気はあまりにも減少して、二度と役職に選ばれなくなります。このことは、役職を持っている人ならその人がどの政党に属していても、誰にでも起こり得るのです。群衆はなんとも気まぐれであり得ることがこれで証明されます。同時に、私たち自身がどれほど気まぐれであるかを示しています。神さまは私たちの心をご存知です。エレミヤ書17:9にはこう書いてあります

(エレミヤ17:9)「人の心は何よりも陰険で、それは直らない。だれが、それを知ることができよう。」

この節は誰の心のことを語っているのでしょうか？ 残忍な専制君主の心でしょうか？ いいえ、違います。あなたや私の心のことです。陰険なことは人類の心の中にあるのです。使徒パウロはローマ人への手紙7:18でこのように言いました。

(ローマ7:18)「私は、私のうち、すなわち、私の肉のうちに善が住んでいないのを知っています。私には善をしたいという願いがいつもあるのに、それを実行することができないからです。」

イスラエルの10部族はシェバの反乱に従いました。

(II サムエル記20:3)「ダビデはエルサレムの自分の王宮に入った。王は、王宮の留守番に残しておいた十人のそばめをとり、監視つきの家を与えて養ったが、王は彼女たちのところには通わなかった。それで彼女たちは、一生、やもめとなって、死ぬ日まで閉じ込められていた。」

覚えておられるでしょう。彼女たちは、アブシャロムが取った女性たちです。

(II サムエル記20:4)「さて、王はアマサに言った。『私のために、ユダの人々を三日のうちに召集し、あなたも、ここに帰って来なさい。』」

思い出されるでしょうが、アマサはアブシャロムのもとで謀反の軍隊の隊長でした。II サムエル記17:25とI 歴代誌2:17によれば、アマサはダビデの姉妹、アビガイルの息子でした。(II サムエル記17:25、I 歴代誌2:17参照)

(II サムエル記17:25)「アブシャロムはアマサをヨアブの代わりに軍団長に任命していた。アマサは、ヨアブの母ツェルヤの妹ナハシュの娘アビガイルと結婚したイシュマエル人イテラという人の息子であった。」

(I 歴代誌2:17)「アビガイルはアマサを産んだが、アマサの父親はイシュマエル人エテルであった。」

ということは、彼はアブシャロムのいとこでした。アマサのもとにあった反乱軍が負けてアブシャロムが死んだあと、ダビデは彼をヨアブの代わりに自分の軍隊の隊長にしていました。

(II サムエル記20:5-7)「そこでアマサは、ユダの人々を召集するために出て行ったが、指定された期限に間に合わなかった。ダビデはアビシャイに言った。『今や、ビクリの子シェバは、アブシャロムよりも、もっとひどいわざわいを、われわれにしかけるに違いない。あなたは、私の家来を引き連れて彼を追いなさい。でないと彼は城壁のある町に入って、のがれてしまうだろう。』それで、ヨアブの部下と、ケレテ人と、ペレテ人と、すべての勇士たちとは、アビシャイのあとに続いて出て行った。彼らはエルサレムを出て、ビクリの子シェバのあとを追った。」

言い換えれば、この男アマサは動いていません。そこで、ヨアブが軍隊を率いて謀反人シェバを追いかけます。同時に、見たところ、アマサもダビデを裏切った者とされて、ヨアブは残忍なしかたでアマサを殺害します。

この章は、ヨアブが謀反人シェバを追いつけるところで終わります。シェバが助けを求めてアベルの町に逃げ込み、彼を捕まえるために軍隊が町を攻撃する準備をしていたとき、ひとりの賢い女性が間に入り込みます。シェバはアベルの人々の手で殺されます。もちろん、これで謀反は終結します。ところが、これから見ていくように、これがダビデのトラブルの終わりではありません。

このすべての試練の間を通してずっと、ダビデは声を上げて泣いたり、泣き言を言ったりしていません。彼は主がまき小屋で自分を取り扱っておられることを知っています。ダビデが罪をうまくやりおさせたなどと思っはなりません。彼は厳しく罰せられました。それでも、ダビデは神さまを愛しました。失敗した信仰のその下には、失敗しない信仰がありました。それが、神の人であり、神さま自身の心になつた人であった、ダビデです。

3年間の飢饉

21章は、イスラエルの地の飢饉の期間をもって始まります。

(II サムエル記21:1)「ダビデの時代に、三年間引き続いてききんがあった。そこでダビデが【主】のみこころを伺うと、【主】は仰せられた。『サウルとその一族に、血を流した罪がある。彼がギブオン人たちを殺したからだ。』」

神さまが飢饉をもたらされた理由は、幾分不思議ではありますが、その中には私たちのためのレッスンがあります。

ギブオン人、サウルの家に戻しをする

(II サムエル記21:2-7)「そこで王はギブオン人たちを呼び出して、彼らに言った。――ギブオンの人たちはイスラエル人ではなく、エモリ人の生き残りであって、イスラエル人は、彼らと盟約を結んでいたのであるが、サウルが、イスラエルとユダの人々への熱心のあまり、彼らを打ち殺してしまおうとしたのであった。――ダビデはギブオン人たちに言った。『あなたがたのために、私は何をしなければならないのか。私が何を償ったら、あなたがたは【主】のゆずりの地を祝福できるのか。』ギブオン人たちは彼に言った。『私たちとサウル、およびその一族との間の問題は、銀や金のものではありません。また私たちがイスラエルのうちで、人を殺すことでもありません。』そこでダビデが言った。『それでは私があなたがたに何をしたらよいと言うのか。』彼らは王に言った。『私たちを絶ち滅ぼそうとした者、私たちを滅ぼしてイスラエルの領土のどこにも、おらせないようにたくらんだ者、その者の子ども七人を、私たちに引き渡してください。私たちは、【主】の選

ばれたサウルのギブアで、【主】のために、彼らをさらし者にします。』王は言った。『引き渡そう。』しかし王は、サウルの子ヨナタンの子メフィボシェを惜しんだ。それは、ダビデとサウルの子ヨナタンとの間で【主】に誓った誓いのためであった。」

これはなかなか顕著な箇所です。これを理解するためには、ヨシュアの時代にギブオン人たちがヨシュアをだまして彼らと盟約を結ばせたことにさかのぼらなければなりません。(ヨシュア記9章参照)イスラエルは誰とも盟約を結んではならないと神さまに命令されたのです。

ある人々は彼らを「非文明的」と考えていますが、かの時代の盟約は、神聖なものとみなされていました。盟約が結ばれたとき、その盟約の条件は守られました。盟約は、ただの紙切れよりも意義のあるものでした。それらは破られてはならなかったのです。私たちの時代、国々が会議の机に座って、盟約を結ぼうとしているのは、ほとんどお笑いです。なぜなら、誰がその盟約を守るのでしょうか？普通の人なら、国々がお互いに上手くやって行こうとする方法について、皮肉になる権利があります。でも、ひとつの国が神さまに従っているとき、その国の言ったことばには拘束力があります。ヨシュアはギブオン人たちと盟約を結びました。でも、サウルが来て、それを破ったのです。ダビデはサウルの行動の償いに成功しました。

でも、逆の観点から見ると、面白いものがあります。神さまは、イスラエルを代表するサウルがギブオン人との盟約を破ったことをお忘れになりませんでした。イスラエル人たちは神さまの民でしたから、彼らはこのことを上手くやりおおせることはありません。3年間の飢饉はさばきとして彼らの上にくだりました。さて、このできごとについて私が有効だと考える適用をして見ましょう。あなたも私も、ある一定の国がキリスト教国とか、神さまに従っている国だ、ということのできない時代に生きています。でも、神さまは国を取り扱われまです。国をさばかれます。神さまは国に責任を問われます。それがどんな国であるかは、関係ありません。神さまはエジプトをさばかれました。バビロンをさばかれました。アッシリヤを、ギリシャを、そしてローマをさばかれました。そして、神さまはアメリカもさばかれます。今、とても注意深く私の言うことを理解してください。私は、アメリカが国として崩壊する過程にある、と思っています。私たちに対する神さまのさばきの証拠がいくつかあります。いくつかのことを示しましょう。

第二次世界大戦以来、アメリカは調停者になろうとしています、相変わらず罪の中に生きています。本当に、第二次世界大戦のあと、アメリカは罪に陥り始めました。同時に、私たちは戦うことをやめることができませんでした。第二次世界大戦以来、アメリカの軍隊が世界のどこかで戦っていないときがありません。もし韓国でなければベトナムです。もしベトナムでなければヨーロッパか、そのほかの大陸です。私たちは今日、今までになく平和について語っています。それなのに、平和はありません。イザヤ書57:21には書かれています。

(イザヤ57:21)「『悪者どもには平安がない』と私の神は仰せられる。」

この崩壊のもうひとつの兆候は、今日、偉大な政治家がいないということです。ワシントンの男たちのかなりの人数が、自分は賢いと思っていることに私は気づいています。そしてこのような考え方は、ひとつの政党に限ったことではありません。見たところ、彼らすべてが、自分たちには世界中の問題を解決することができると感じているようです。実際、アメリカに偉大なリーダーたちがいないのは、むしろ哀れなことです。これは神さまのさばきのもうひとつの証拠です。神さまがイザヤ書3:12でなんといっておられるか、覚えていますか？

(イザヤ3:12)「わが民よ。幼子が彼をしいたげ、女たちが彼を治める。わが民よ。あなたの指導者は迷わす者、あなたの歩む道をかき乱す。」

私たちは、この方向に向かって続けてアメリカが動いていることを見えています。

ここ南カリフォルニアは、まさにボルノグラフィーの中心地となりました。同時に、多くの「カルト」や「～主義」が南カリフォルニアから始まっています。最近も、神さまは私たちを揺すぶられました。(訳注:この本が書かれた少し前に大きな地震があったことを言っているようです。)私は、地震は神さまのさばきだったと思います。今は、地震には科学的な説明があることは知っています。南カリフォルニアの下には、サン・アンド

レア断層があり、他のいくつかの断層もあります。事実、ここにはとてもたくさんの fault があるのです！（訳注：断層と過ちはどちらも fault ということばです。マギー博士はカリフォルニアには多くの断層と同時に多くの過ちもある、と言いたいようです。）私は神さまがアメリカをさばき始めておられると信じています。アメリカは、無法とひどい不道徳で有罪です。神さまはその理由で国々をさばかれるのです。もし、II サムエル記21章がひとつのことを示しているとしたら、それは、神さまが国々をさばかれると言う事実です。

ペリシテ人との戦争

次に私たちは、ダビデがペリシテ人たちとの継続的な戦いに関わっていることを見ます。

（II サムエル記21：15－17）「ペリシテ人はまた、イスラエルに戦いをしかけた。ダビデは自分の家来たちを連れて下り、ペリシテ人と戦ったが、ダビデは疲れていた。それで、ラファの子孫のひとりであったイシュビ・ベノブは、ダビデを殺そうと考えた。彼の槍の重さは青銅で三百シェケル。そして彼は新しい剣を帯びていた。しかし、ツェルヤの子アビシャイはダビデを助け、このペリシテ人を打ち殺した。そのとき、ダビデの部下たちは彼に誓って言った。『あなたは、もうこれから、われわれといっしょに、戦いに出ないください。あなたがイスラエルのともしびを消さないために。』」

ダビデは偉大な人物です。そして彼の部下たちは、だれもダビデの代わりをすることができないことを知っています。今、ダビデは年をとってきました。戦いに出るとき、もう以前のようなスタミナがないことに彼は気づきます。簡単に負かされてしまいます。これはダビデにとって、今までにない経験です！ イスラエルのリーダーたちは、ダビデは戦うには年をとりすぎていることに気づき、彼にそう言います。彼らはダビデに、戦場よりも家にいて欲しいと話します。

大きな戦いが起こり、神さまはイスラエルに勝利を与えられました。

（II サムエル記21：22）「これら四人はガテのラファの子孫で、ダビデとその家来たちの手にかかって倒れた。」

この節で言われているラファ（訳注：英語では the giant、巨人）とは、ゴリヤテのことです。思い出されるでしょう。ゴリヤテと戦いに出たとき、ダビデは5つのなめらかな石を拾いました。それは、ダビデが一発目で失敗するかも知れないから、予備の石を取ったのだ、と生き生きと説明するのを聞いてきました。そのようにダビデとゴリヤテの物語を教える人たちは、私たちのためのレッスンは、私たちもまた、予備を持たなければならないということだ、と言います。でも、ダビデが5つの石をとったことの説明は、ゴリヤテには4人の息子たちがいたからなのです。彼らもペリシテの軍隊の一員でした。

ダビデは、自分がゴリヤテを殺したら、4人の息子たちが出てきて戦おうとするかも知れないことを知っていました。ダビデはそのときには4人と戦うことはありませんでしたが、もちろん息子たちは復讐したいと思ったことでしょう。このダビデの最後のペリシテ人との戦いで、もしもアビシャイがダビデを助けに来なかったら、ゴリヤテの息子のひとりイシュビ・ベノブが父親の敵を取っていたことでしょう。

ダビデが若くてゴリヤテと戦ったとき、ほかの4つの石を持っていて、ゴリヤテの4人の息子たちと戦う用意ができていました。ダビデは、石投げで百発百中でした。おそらく毎日数時間練習していたのでしょう。彼はリスさえも入り込めないほどの小さな木のほらに石を投げ込むことができたのではないかと想像します。

この章で、戦士としてのダビデのキャリアは終わります。これまで、神さまはすばらしい方法で、ダビデをすべての敵の手から救い出してくださいました。

ダビデの救いの歌

22章には、神さまがダビデを敵から救い出してくださったあとにダビデが歌った歌が書かれています。詩篇18篇と同じです。

（II サムエル記22：1）「【主】が、ダビデのすべての敵の手、特にサウルの手から彼を救い出された日に、ダビデはこの歌のことばを【主】に歌った。」

この歌は、見たところダビデが生涯の終わりに作ったもののようです。自分の生涯をふり返って、ダビデは神さまの御手が動いて彼をこの年になるまでたずさえてきてくださったことを見ることができました。私は、詩篇23篇も同じ頃に書かれたのではないかと考えています。なぜなら、彼は生涯のこの時期に来て、次のように言うことができたからです。

（詩篇23:1）「【主】は私の羊飼いです。私は、乏しいことはありません。」

パウロは次のように書きました。

（ピリピ1:6）「あなたがたのうちに良い働きを始められた方は、キリスト・イエスの日が来るまでにそれを完成させてくださることを私は強く信じているのです。」

神さまはあなたをこの時点までたずさえて来てくださいました。どうして今、神さまがあなたをがっかりさせることがあるでしょう？神さまがダビデにそそいでくださる愛のケアが、彼に将来のための確信を与えます。

（II サムエル記22:2-3）「彼はこう歌った。『【主】はわが巖、わがとりで、わが救い主、わが身を避けるわが岩なる神。わが盾、わが救いの角、わがやぐら。私を暴虐から救う私の救い主、私の逃げ場。』」

「主はわが巖。」巖の上は休む場所です。キリストは私たちの救いの岩です。土台です。私たちは主に憩います。

「わがとりで。」とりでは人生の守りです。

「わが救い主。」主は誘惑のときに私たちを救い出してくださいます。

「（わが身を避ける）わが岩なる神。」主は私の巖であるだけでなく、私の巖の神、つまり私の信仰の神さまで。主は私の信仰の対象である方です。

「わが身を避ける（わが岩なる神。）わが盾。」主は私を敵から守ってくださいます。

「わが救いの角。」主に私の救いがかかっています。

主は「わがやぐら」です。私はやぐらに、その地を見に行きます。主は私のヴィジョンです。

「私の救い主、私の逃げ場。」主は「私を暴虐から救う」方です。

私たちは、この詩が書かれた精神に匹敵するものが何もない時代に生きています。今日、偉大なヴィジョンがありません。この科学の時代、すべてのものはコンピューターで動いています。すべてのものはすでに録画・録音されています。私たちは2たす2が4であることは知っていますが、本当にオリジナルなものを生み出してはいないようです。神さまを締め出した人生は、何と単調であることでしょうか。それにひきかえ、ダビデは自分の人生のすべての経験の中に神さまを認めています。そして彼の詩的な感謝の心の表現は、文学の傑作です。

（II サムエル記22:36）「『こうしてあなたは、御救いの盾を私に下さいました。あなたの謙遜は、私を大きくされます。』」

ダビデは荒っぽく、頑健な男でした。激しやすいタイプでした。でも、神さまは優しく、ダビデの神さまへの愛と神さまとの交わりは、彼を静めました。神さまへの愛と神さまとの交わりがダビデを慈悲深い人物にしました。

「あなたの謙遜は、私を大きくされます。」あなたも私も、もっと神さまと交わる必要があります。いやあ、私たちが今生きているこのとき、人間にはどれほど神さまが必要であることでしょうか！

これは偉大な詩篇です。ダビデの書いた詩篇はすばらしいものです。それらは人の心を開かせ考えを開かせ、人生を開かせます。それらは、あなたを生かします。本当に「生きたい」という人々のことをよく耳にします。今日私たちには、快適さと小道具があふれています。多くの若者は、すべての快適さが手に入る、豊かな家庭で育っています。でも、多くの人たちがそのすべての豊かさを離れて、浮浪者として生きています。彼らは本当に「生きたい」からそうするのだと言います。「物」はあなたを生かしてはくれません。逃げ出して、神さまが私たちにつけられた帯や紐をすべて捨て去っても、そのことも私たちを生かしてはくれません。私たちが神さまとの正しい関係に入るときのみ、本当に生きることができるのです。

サムエル記22章は、偉大な詩篇です。これは、ダビデが自分の人生をふり返って作った詩篇です。また、詩篇23篇に行くと、これは小さな未熟な少年によって書かれたのではないことが分かるでしょう。詩篇23篇は、人生が何たるかを知らない大学生によって書かれたのでもありません。また、ビジネスや政治でトップに行きたいという野望を持っている中年の男性が書いたのでもありません。これは、有名になりたい人によって書かれたものではありませんでした。詩篇23篇は、自分の人生をふり返って神さまの御手が自分の人生のうちに動いているのをたどることのできた、年老いた王によって書かれたものでした。ダビデは、すべてのものを味わった人でした。この世には、ダビデの味わわなかったものなど、何ひとつなかったのです。ダビデの結論は、すべてのものの中でもっともすばらしいことは、「【主】は私の羊飼ひ」であるということだったのです。

この美しい賛美の歌は、文学的に優れているだけではありません。この歌は私たちのために新しい展望を開き、夕焼けや、月が昇ることよりももっともって栄光に満ちた何かを見せてくれます。この歌は、ひとりの人が全能の神さまと持っていた、すばらしい関係のことを語っています。今日、私たちはどれほどその関係が必要なことでしょう！